
創世記4：1－7。4人の登場人物：アダムとエバ、カインとアベルである。

①「アダム」

4：1「人(アダム)はその妻エバを知った」とある。「知った」とは直接的には、『性的な関係』のことを指しているが、聖書がわざわざ性的な関係のことを「知る」と記しているのは、その意味においては、より深いものがあるといえる。

これまでアダムは、食べてはならないと神に言われていた善悪の知識の木から、その実を取って食べ、神に対して罪を犯し、ついに彼らは、自らに「死」を招く存在となった。それゆえ、神は、彼らに与えていたエデンの園から彼らを追放し、そしてその所にあった「いのちの木への道」も塞がれた。そのような神の裁きのなかで、彼らに待ち受けていたのは、働いても働いても、ただただ「死」が待つという、悲しき変えようがない、自らが犯した「罪の現実の世界」である。また彼らが、善悪の知識の木からその実を取って食べたことにより、彼らは目が開かれ、互いに裸であることを知り、自分たちの裸の部分隠すような者になった。これは、彼らが、それまで互いに隠すところがない、いわば完璧で美しい透明な関係であったことから、互いに隠しどころを持つ者となり、お互いを知ることが手探りの関係へと変えられたということでもあった。それゆえ、このような関係の中で、「人(アダム)は妻エバを知った。」とは、神の祝福をもう一度知る豊かな時だったのである。自らが犯した罪の現実の世界の中で、妻を通して神の祝福を「知る」とは、アダムにとって、何よりの慰めとなったであろう。アダムにとって妻という存在は、まさしく、神から与えられている神の恵みを知る存在でありつづけているということ、彼は体験的にも「知った」のである。

夫婦とはそういう意味では、まさしく互いの存在が神の素晴らしさを知ることができる恵みなのである。そしてこの夫婦という、いわば婚姻関係でなければ知ることが出来ない、より深い部分、明らかにされない部分があるということも含め、アダムはこの時「妻エバを知った」ということである。それはまさに恵みであった。

②「エバ」

「彼女は身ごもって、カインを産み、「私は主によってひとりの男子を得た」とある。エバもまた、自らが犯した罪の現実の世界の中で、死を待ちながら生きていかなければならない命の儚さを感じていたのであろう。そして神の裁きの宣告に対して、悔いていただろう。その中で、彼女に新しい命が与えられた。裁きによる「死」ではなく、新たな「命」を「得た」のである。エバは喜び、身ごもることを通して神の祝福を彼女は知り、そして実際に子を産むことを通して、さらにその命の継承という恵みを身をもって体験したのである。それゆえ彼女はこの命の恵みは主からのものであると、わざわざ「主によって」と明確に言ったのである。そしてその名を「カイン」と呼んだ。「カイン」とは、「得る」という言葉「カニイ」と実に似ている。(「カイン」の直訳は「槍」であるが・・・)おそらくこれが「カイ

ン」の名の元となったであろう。なぜなら、アダムとエバは、これまで何かに名前を付けるときは、言葉遊びか語呂合わせのように、男をイシュ、女をイシャと呼んだりしていることから、考えられるからである。また何よりエバが、実際に「主によって…得た」と言っていることである。このようにエバは、カインの誕生を心から喜んでいるのだが、続く2 vでは、第二子として与えられた子のことを「アベル」と呼んでいる。「アベル」とは「むなしい、空(そら・くう)」などの意味である。

エバは、なぜ第二子になってこのように極端に、消極的な意味の言葉を用いて、その子の名を呼んだのだろうか？

もしかすると、はじめの子が生まれた時は確かに喜んだが、第二子が生まれる時には、どんなに新しい命が生まれても、結局人はこの罪の現実の世界の中で「死ぬ」存在であるというむなしさが、彼女の心にあったのかもしれない。「アベル(むなしい)」という名の中に、何かエバのそうした心の変化を感じる。おそらくエバだけではなく、人とは絶えず心がゆり動く不安定な存在であるのかもしれない。エバを通して私たちはそのことも知るのではないだろうか。

③-④「カイン」と「アベル」

2 vを読むと、カインとアベルには、それぞれ仕事を与えられている。

彼らは生れてすぐに働いているということではない。カインは土を耕す者となり、アベルは羊を飼う者となった。どちらもアダムが神から与えられた仕事である。生き物に関しては、創1章で、「全ての生き物を支配せよ」と、生き物を管理し、統治することの命令が与えられている。そして「土を耕す」ことは、アダムの仕事としてより積極的に多くの箇所に出てくる。裁きの後も3：23で言われている。

おそらくこうしたことからアダムは長子であるカインに、土を耕す仕事を与え(継承させ)、アベルには羊を飼う仕事を与えたのかもしれない。どちらが得意だとかそういうことではないように思える。

彼らは父であるアダムに土地の耕し方、羊の飼い方などの指導を仰いだであろう。エバとも家族として時を過ごし、様々なこと聞き、学び、そして彼らは成長していったことが想像出来る。

しかし、そうした成長過程の中で、この兄弟には同じ家族の中で育ったにもかかわらず、異なった思いが芽生え、そして成長していったのである。そしてそれが顕著に表れたのが、まさしく3 vからの彼らの捧げものなのである。

創4：3-5 v 「・・・」

3 vの「ある時期なって」とは、「神が時を定めて」という意味である。また「持ってきた」とは、創2：19の「連れて来られた」と同じ言葉である。つまり、「神が時を定め、神ご自身が人に捧げものを持ってこさせた」のである。神が人を招いたのである。

カインは土地の作物を、アベルは自分の飼っている羊の群れの中から最上のものを主に持ってきた。

新約聖書には彼らの信仰がどのようなものであったかが記されている。

カイン→Iヨハ3：12

アベル→ヘブ11：4

これらのことから分かるが、カインは悪意を持って、そしてアベルは善意をもって主に捧げたのである。

しかしなぜこれほどまでに彼らの思いには違いが出たのか。

本来カインとは、神からの祝福を意味して「得る」というものだったが、彼が生まれてから成長していく過程の中で、『神がいるのに、なぜ地はこれほどまでに荒れ果てているのか、働けども働けども、死を待つ苦しみだけ地の上にはあるではないか!』と、神に対する不信感が募っていたのだろう。そしてその名の意味である「得る」という意味は、次第に何もない土地から少しでも自分自身に「得る・得たい」という意味での「カイン」となっていったのかもしれない。

それがここでの彼の主への捧げものの態度であり、Iヨハ3：12に記されていることなのであろう。カインは少ない地の産物を主に捧げることを惜しみ、その辺の間に合わせのもので事を済ませようとしたのかもしれない。またカインは、自分が育てた地の産物は、自分のものであり、神から与えられているという信仰ではなかった。神に感謝するというよりも、神を軽視し、適当に扱い、見下す思いの方が強かったのである。言い換えれば、『なぜ、自分のものを神にささげなければならないのか?』と、考えていたのかもしれない。

ところで、「神に捧げものをする」とは、いったいどんな意味があるのか。神は「神に捧げものをする」ときに、いったい何を求めておられるのだろうか。

Iサム15：22「主は主の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。」

この御言葉は的を射っている。すなわち、捧げものとは何か立派な代物を献上するという~~こと~~では無く、何よりも神を信頼し、神に対する私たちの心の態度が大切であるということである。

また「神に捧げものをする」というのは、神への礼拝行為である。神への礼拝の中で、神は彼らがいっただいどのような「心」をもって捧げるのかを試しておられたのである。

昔、クリスチャンの知人から「ふーポン・クリスチャン」にならないようにと言われたことがある。「ふーポン・クリスチャン」とは、読まずに飾りのように置いてあった聖書を、日曜日になると聖書の上の埃を「ふー」と吹いて、「ポン」と叩いて教会にもってくるクリスチャンのことだそう。たしかにこれでは、神への礼拝のために自分たちは何も準備していませんでした。と言っているようなものである。私たちも同じように、捧げものをする日(礼拝)にだけ準備すれば良いということではなく、神が定めた期日である捧げる日(礼拝)までの中で、どれだけ自分が神に対し最善の用意が出来るか、そして日々信仰と献身の思いを持って歩み、賛美も祈りも聖書朗読もすべて心から捧げるのである。また献金もしかりである。献金に関しては、多くの場合間違った考えを持つことがある。聖書は献金に関してこのように教えている。

I コリ 16 : 1 - 2

II コリ 8 : 10 - 12

II コリ 9 : 5 - 7

ルカ 21 : 1 - 4

献金は多いか少ないかではなく、その人の収入に応じて心からささげるもので十分なのである！そしてその人の信仰が伴っていなければならないのである。カインにはこうした「信仰」が無かったのである。

一方、アベルはどうだったか。アベルは「むなしい」という意味である。自分の名が「むなしい」という意味であることに、彼は考えただろう。では「むなしい」とは何か？それは目の前に広がる罪の現実の世界、そしてそこにはいばらの土地と死とが待ち受けているという、どんなにもがいても変えることができない「むなしさ」である。しかしこのなかで、アベルは、「神だけが希望である！」ということを知ったのだろう。だから彼は最良のものを主に捧げたのである。それこそがまさにヘブル 11 : 4 の「信仰によって、アベルはカインよりもすぐれたいけにえを神にささげ、そのいけにえによって彼が義人であることの証明を得ました。神が、彼のささげ物を良いささげ物だとあかししてくださったからです。彼は死にしましたが、その信仰によって、今もなお語っています。」ということである。

また、旧約聖書の伝道者の書には、「空の空、すべては空」とある。何とも仏教的な言葉の使い方だが、実はこの「空」とは、ヘブル語で「アベル」なのである。そして伝道者とは、ヘコヘレトとも言うが、その意味は、集会を導く指導者、あるいは人生をいかに歩むべきかを若者に教える長老・経験者などのことである。その伝道者が記した言葉が「空(アベル)の空(アベル)、全ては空(アベル)」なのである。人生がいかに「むなしい」かを悟っている。そしてその最後は「結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。」と、伝道者もまた「神だけが希望である！」ことを記したのである。これこそが「空の空・むなしい・アベル」である。アベルは自分の名が「むなしい」という中で、希望は神にのみ！あることを悟ったのである。

私たちもこの神にのみ目を向ける者でありたい。

最後にマタイ 5 : 3 の御言葉で終わりたい。

「心の貧しい者(自分はむなしい存在であると知っている者)は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。」

「アベルはアベル(むなしい)」ではなく、神にのみ目を留め、義と認められた者なのである。